

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow

能装束
織師

筒井

Kensuke Tsutsui

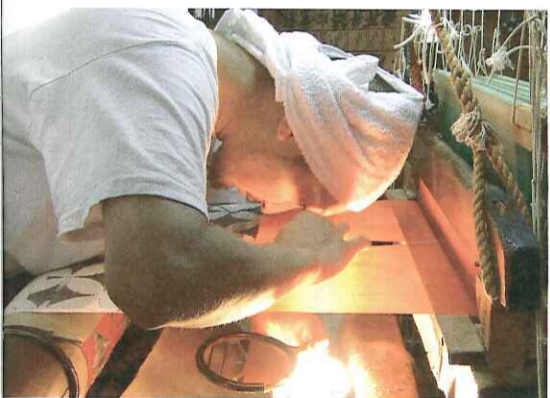
謙丞
氏



京都市上京区——この一帯は高級織物の代名詞、西陣織で有名な地域だ。自転車に乗り西陣の町を慣れた様子で走る青年が向かったのは、一軒の京町家。ここは、能装束を専門にする工房「佐々木能衣装」である。後を追って中に入ると、凛とした職人の顔をした織師、筒井謙丞さん28歳の姿が。

筒井「22歳の頃は、まったく別の仕事をしていました。そして、特に深い考えもなく、単に『度、西陣織を作っている現場を見てみたいなあ』くらいの軽い気持ちで、佐々木さんを知る親戚を通じて工房を見学させてほしいとお願いしたんです。もちろん、この職人にな

能装束の織師になろうと決めたきっかけは？



りた、なんて考えはこのときまったくありませんでした。ところが、仕事場に入った途端、まさに体に電気が走ったんです。そのときは、工房内に誰もいなくて、ただ機（はた）だけが静かに目に入ってきました。それは圧倒的な存在感でした。その機が動く姿を見たい、そして自分で機を動かす織りを習得したい、と強く思ったんです。うまく言葉では表現できないのですが、そのときの自分の思いや感覚には不思議と自信がありました。そして、自分を信じて、翌日正式に入門をお願いに行きました」



能装束は、京都の高級織物「西陣織」の一つ。西陣織とは、西陣の町で作られる織物の総称である。平安時代、朝廷に納める織物を生産したことから繁栄した。時代が流れ、西陣での生産が次々と機械化される中、柄が繊細で緻密な作業を要する能装束は、今もなお、人の手で織り続けられている。

「紋紙」を用いた昔ながらの手織りの技法は大変貴重で、屋根裏には大正時代から使用してきたたくさんの紋紙が残されている。たとえば2種類の模様なら、およそ1500枚の紋紙が使われるという。模様が変わるたびに紋紙を取り替え、打ち加減に神経を集中させ


日本の伝統・文化を継承する若者たち「明日への扉」

わが国が世界に誇る、固有の伝統・文化の数々……。先人たちが築いてきた、その知恵や技を受け継ぐ若者たちがいる。夢を追いかけ日々研鑽する彼らの「ひたむきで真摯な姿」と普段の暮らしから垣間見える“素顔”をご紹介します。

MOVIE

動画コンテンツ「明日への扉」では、日本の伝統・文化を受け継ぐ若者たちの姿を、臨場感ある映像でご紹介。30人以上のバックナンバーがご覧いただけます。

Web版
パソコンやタブレット型端末など各種デバイスでご覧いただけます。
<http://www.athome.co.jp/tobira/>

TV
ディスカバリーチャンネル(CS) 
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

鎌倉の見える山なり蕨とる 一茶



イラスト ひらしみも

旧東海道は今の国道一号线とほぼ重なる。東京都中央区の本橋から品川・川崎を経て、神奈川つまり京急神奈川駅あたりで、横浜市街地を遠巻きに上れば保土ヶ谷に至り、古くはここまでが武蔵国である。さらに道なりに九キロほど進むと吉田大橋が架かる柏尾川で、ここが戸塚の宿の東入り口、すなわち相模国であった。

鎌倉へはこの橋を渡らず、川の手前を左折して鎌倉街道をゆく。十二世紀の末に、源頼朝が鎌倉幕府を開いたこの地は三浦半島の根元に位置し、東西南北の南に相模湾が広がるほかは、三方とも複雑に入り組んだ山々に囲まれている。標高は高くないが、山の斜面は険しい崖が多く、平地が少ないために大都市への展望

はひらけそうにない。だがその分、敵の攻撃や侵入を防ぎやすく、海上交通には有利な港もあって、自然のままの要害都市であったといつてよい。

掲出句は、ワラビを摘んで腰を伸ばすと、鎌倉の町が見えるという意。明快な表現ゆえに、山菜採りの人々と鎌倉時代の暮らしが二重写しになって美しい。古歌に「石走る垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりけるかも」(志貴皇子・万葉集)とあるように、ワラビはゼンマイとともに春を告げる山菜の代表であった。気候温暖のこの地は、今も近隣に先駆けで、かぐわしいワラビの新芽が出ることだろう。作品は『享和句帖』による。

東洋大学教授 谷地快一



能装束

日本の伝統芸能、能楽において、演出に欠かせないのが能面と能装束である。能装束は唄や舞を主としたシンプルな舞台において、演目の内容、そして、精神性を表現する。絹を主な素材とし、紋様や色調に特徴があり、役柄の解釈や演出と密接に関わる。繊細な柄と、重厚でありながら柔らかな風合いは、手織りならではの。



筒井「辛いこと、そうですね…まだ織りをやりたいのに終業の時間が来てしまうことくらいですかね(笑)。失敗もあるんですけど、それを乗り越えて成長できる毎日が楽しくてしょうがないんです。そして、まだまだ満足できるものを織り上げていく。

入門して辛いと思ったことは？

そんな高度な手仕事の技術が必要とされる織りの世界で、筒井さんは熟練の職人に混じり、日々腕を磨いている。

のを織り上げていないので、もともととがんばらないと。この道何十年の、尊敬する大先輩たちでさえ、いまだに「まだまだ満足できない」とおっしゃっているの、自分はその何倍も何十倍も努力しないと、つて思っています」

機械で織られた能装束は、裏を見ると、効率良く織るために、模様部分がよこ糸で埋め尽くされている。一方、手織りのものは、よこ糸を細かく分けて通すため、無駄な糸が少ない。手間も時間も掛かるが、糸が少なくて分ける。仕立てる際に裏は隠れるため見た目に影響はないが、能装束は何枚も重ねて着用し、時には全身で数十キロもの重さになるため、軽さを出すことで舞う能楽師の助けになる。

装束を作るに当たって心掛けていることは？

筒井「舞台の上で、演者の方がより演技しやすいよう、表現しやすいよう、少し

でも軽く、柔らかく作るよう考えています。それには手間も時間も掛かります。しかし、そこを省いたり、手を抜いてしまったりしては、本当の意味での「良い物」は作れません。他には、この部分に一番いい色を持ってきたらより引き立つか、より効果的かを考えるために、実際に能の舞台を見て勉強したりもしています。少しでも自分が作ったものが舞台上で、演者の方のお役に立てればと思っています。入門して6年が経ちますが、先輩方はまだまだ遠い存在です。でも、機械織りの仕事が好きだ、という気持ちだけは負けないつもりです。初めて工房に入ったときの気持ちを決して忘れることなく、これからも日々、精進したいと思っています」

700年余りも続く能楽は、表舞台には現れない職人たちの努力も、支えとなっている。筒井さんも、その支えとなるべく、知識と技術の向上に励む。「この仕事は誰よりも好き」という筒井さん。その強い気持ちが原動力となり、険しい道であろうと、彼が歩みを止

取材を終えて

めることはない。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

古き良き伝統が今も残る京都の町で、その空気を常に肌で感じながら育った筒井さん。伝統を重んじつつ新しいものを吸収するバランス感覚を最も大事にしている若者です。工房では先人たちの魂を受け継いでひたすら技を磨き、情熱を感じさせる眼差しで織り込む姿が印象的でした。家に帰れば良き夫、そして良き父。趣味でピアノも弾きこなし、仕事場とは違う優しい眼差しがありました。

※2011年10月取材
掲載内容は取材当時のものです。



Profile 筒井 謙丞

能装束 織師。1983年生まれ、28歳。京都市出身。22歳で能装束制作の名門「佐々木能衣装」の門を叩き、現在では貴重な手織りの技術継承に研鑽している。